

『大正大学研究紀要』第100輯を記念して

第33代学長 多田孝文

『大正大学研究紀要』が第100輯を迎えた。実に慶賀の至りである。大学の研究推進部より記念の原稿の依頼があった。御用繁多を言い訳に「書かない」と謝絶したが、再三の依頼に怠け者が渋々筆をとった。

さて、何を書こうかと柄にもなく来し方を振り返った。学部学生時代は、自分の好きな方に向いたきり、怠惰に過ぎたが、大学院に入学を許された時、四年間の不勉強を大いに悔やむことになった。直ちに反省を込めて休学を申請し、仏教における学問のあり方とは如何、真の自己とは如何、について真剣に見つめ直したかった。自坊に籠もり出てきた時には、髪も髭も伸び放題、人相も変わっていたそうである。結局二年間休学してしまった。

その時、師匠である父親の蔵書をあさった。その中には、古い「紀要」をはじめ眺めた。本学創立後まもない昭和2年には、各研究室たよりや大学の動向についてを中心とした『大正大学々報』が発刊され、戦時中の休刊を経て現在継続されている。一方、昭和29年頃より、いよいよ本学の学術研究の成果を公開しようとの要望から、諸学者による各研究分野の論文が『大正大学研究紀要』として創刊された。

私の休学当時、すでに10輯ほどが発刊されていた。いずれの輯も仏教、国文、史学、宗教、哲学など各分野を先導する錚々たる執筆陣であった。研究分野は異なっても、その論証、論考、論述とは、確あるべしとの範を示されて

いた。私が修士課程に復学するとこれら先生方の講演・講義を拝聴することになった。学識はもちろん、自信にあふれた研究姿勢と、すばらしい人間性に感動したものであった。

後年『紀要』には、私の小稿も一・二掲載を許されたが、いま思えば空恐ろしいかぎりである。

その頃から、研究論文のみならず学門全般において、確たる内証を得ないまま推論のみから導きだされる断定的な結論に終始してはならない。学問のための学問であつてはならない。自己顕示欲の充足のための学問であつてはならないと自らに言い聞かせ、ゆつくりと歩を進めることにした。気がつくともM・Dで10年も本学にお世話に成つていた。それは「自分から進んで法を求めようとする者は、多くを見たり聞いたりして言語を得ることが出来たとしても、自己心を知らなければ真のよるこびを得ることは出来ない」(智顛述、『観心論』より)との注告に讃同したからである。今でも、苦慮煩悶しながら思うことは勉学上で得られた結論と自らの言動が一致しないのであれば、それは本当の学問ではない、少なくとも仏教ではないと思つてゐる。

「多田孝文は勉強しません」私の口癖であるが、勉強を弄したことは一度もない。勉強はつらい。そして孤独である。誰もが一度は味わう心持ちであろう。しかし、一步一步達成し得る喜びは格別であるが、その業績とて自分一人の力で築いたものではないし、自分のどこひとつを取り上げて見ても、先輩、同輩、あるいは後輩たちの善知識との縁の上に成り立ち、永々とした学の営みの中でのことである。そこには、常に仏天の加護があつたことを忘れる訳にはない。

大正大学には、我利我利者はいない。こう書くと「多田孝文に論文を書くな」と言われたという者が必ずでてくる。そうはいかない。むしろ、どんどん書いてほしい。その際に忘れてほしくない一事がある。

「能く行い 能く言うは 国の宝なり」『山家学生式』の一節である。もちろん建学の理念にも通底する。この事を忘れず、言行が一致するならば、『大正大学研究紀要』は、これからも燦然たる成果を紡ぎつづけるであろう。